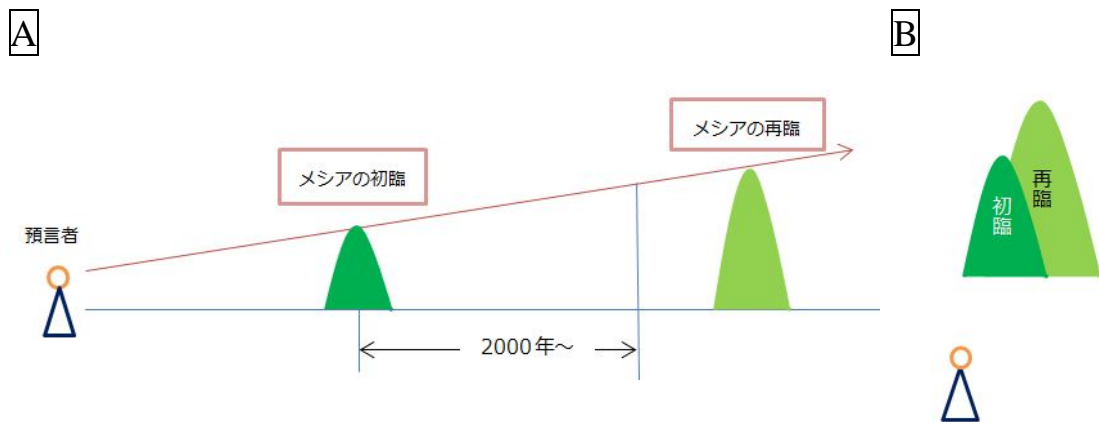


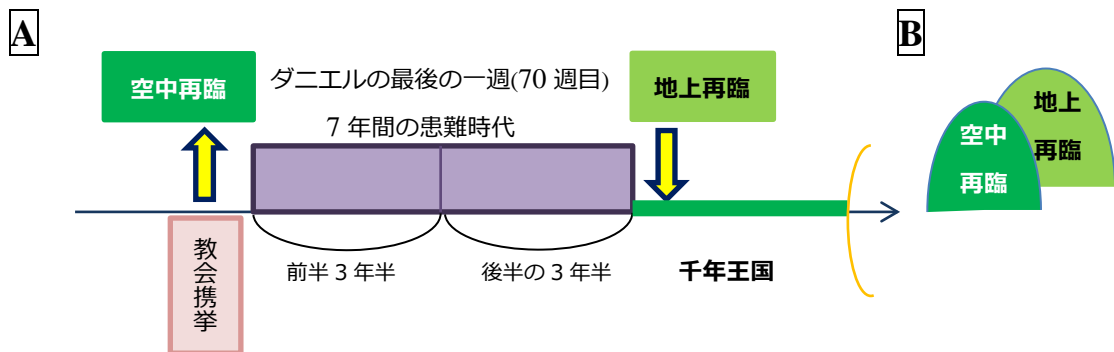
キリストの空中再臨と教会の携挙（その一）

ベレーシート

●これから何回になるか分かりませんが、「終末預言」、「終わりの日」についての学びをしていきます。今回はその第一回目です。キリストの再臨は二度あるというお話をします。以下の、預言者的遠近法の図をご覧ください。旧約の預言者たちが、メシア(=キリスト)の来臨をどのように語っていたかを示す図です。神のご計画ではAのようにメシアの来臨には「初臨」と「再臨」があるにもかかわらず、旧約の預言者たちの目には、Bのように、時間軸のない二次元のように一つの絵のように見えていたのです。



●聖書ではしばしば同じ出来事が二段階になっていることがあります。「キリストの再臨」の出来事も実は二段階あります。それは、「空中再臨」と「地上再臨」です。



●以下の曲の歌詞をご覧ください。最初は聖歌(No.634)、後は「メ・ゴサレ」(Me Gozare)、「私は喜び楽しもう」(I will delight)というタイトルのスペインの賛美です。

聖歌 634

1. 世の終わりのラッパなりわたるとき
世はとこよのあさとなり
救われし者はよものすみより
すべて主のもとに呼ばれん

- Ref その時わが名も その時わが名も
その時わが名も 呼ばれなば必ずあらん
2. そのときねむれる聖徒よみがえり
さかえのからだに変わり
われらも共に携え挙げられ
空にて主にあいまつらん

3. 世のわざを終えてあまついこいに

招かれるる日近ければ
なおも主の愛を世人に語り
みさかえのために尽くさん

「メ・ゴサレ」

喜び楽しみ 神をほめたたえよう
小羊の婚姻の時が来たから
輝く衣を身にまとい 花嫁は整い
主は王となられた 喜びさけべ

●これらはいずれも「空中再臨」と「教会の携挙」のことを歌った信仰の歌です。聖歌 No.634 の歌詞は 1893 年の作です。実は、このことは重要なのです。今から 100 年ほど前には、「キリストの空中再臨」と「教会の携挙」を内容とした信仰の歌を歌っていたという事実です。しかも、この信仰は初代教会の信仰でもあったのです。そのことを教えている聖書のテキストを学びながら、将来に起こる事を正しく学ぶことによって、今の信仰の歩みを確かなものとしたいと思います。今回の学びは私たちにとって力強い励ましと慰めを受けるはず

1. テサロニケの手紙第一 4 章 13～18 節

【新改訳 2017】

- 13 眠っている人々については、兄弟たち、あなたがたに知らずにおいてほしくありません。あなたがたが、望みのない他の人々のように悲しまないためです。
- 14 イエスが死んで復活された、と私たちが信じているなら、神はまた同じように、イエスにあって眠った人々を、イエスとともに連れて来られるはずで
- 15 私たちは主のことばによって、あなたがたに伝えます。生きている私たちは、主の来臨まで残っているなら、眠った人々より先になることは決してありません。
- 16 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、**主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、**
- 17 **それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります。**
- 18 ですから、これらのことばをもって互いに励まし合いなさい。

●16節に「号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、**主ご自身が天から下って来られます。**」とあります。すでに2000年前に、主は幼子として処女マリアを通して誕生するというかたちでこの世に遣わされました。しかし再び来られる時には、天から直接下りて来られるのです。しかしそれは地上にではなく、空中までです。まず、キリストを信じて死んだ者たちがよみがえります。そのあとで、この地上に生きている者たちが、彼らと一緒に引き上げられ、空中で主と会うと記されています。

●このテサロニケの手紙では、13節に記されているように、イエシュアを信じて眠った人々たちが(死んだ人々が)これからどうなるのか、分からないでいる者たちに書かれた手紙です。パウロはこう語っています。13節「眠っている人々については、兄弟たち、あなたがたに知らずにおいてほしくありません。あなたがたが、

望みのない他の人々のように悲しまないためです。」、そして「キリストの空中再臨と教会の携挙」について語ったあとに、再び、18節で「ですから、これらのことばをもって互いに励まし合いなさい。」とあります。私たちにとっても、ここに記されていることを知ることはとても重要です。

●さて、携挙の特徴について目を留めてみましょう。新改訳2017の17節には、「彼らと**一緒に**雲に包まれて**引き上げられ**」とあります。新改訳改訂第三版では「**たちまち**彼らと**いっしょ**に雲の中に**一挙に引き上げられ**」と訳されていましたが、新改訳2017には「一挙に」という表現はなく、「彼らと**一緒に**」と訳されています。ギリシア語原文には「ハマ」(ἄμα)があります。この「ハマ」には、時間的な「ただちに、たちまち」という意味と、様態的な「一緒に」という二つの意味があります。「**引き上げられ**」と訳されたギリシア語(「ハルパゾー」(ἁρπάζω)の未来形受動態)にも、①ひったくる(奪い取る)、②さらって行く、③つかまえて連れて行く(無理やりに連れて行く)という意味があります。そのようにして、空中に**一挙に、一緒に、引き上げられる**ことを意味します。そのようにして「空中で主と会うのです。」。「一挙に」は「まばたきするような一瞬」で、おそらくサタンもビックリです。携挙はだれにも妨害することができないほどの「瞬間の出来事」なのです。ですから地上にいる者はすぐには気づきません。

●**空中再臨は「奥義」**(=それが明かされるまでだれも分からない事柄)です。つまり「空中再臨」の奥義は使徒パウロにはじめて啓示されました。しかしイエシュアも地上での生涯で、そのことに関して(多くではありませんが)語っています。以下の箇所がそれです。

2. ヨハネの福音書14章1~4節

【新改訳2017】

- 1 「あなたがたは心を騒がせてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。
- 2 わたしの父の家には住む所がたくさんあります。そうでなかったら、あなたがたのために場所を用意しに行く、と言ったでしょうか。
- 3 わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです。
- 4 わたしがどこに行くのか、その道をあなたがたは知っています。」

●3 節に「場所を用意したら、**また来て**、あなたがたをわたしのもとに**迎えます**。」とあります。「あなたがた」とはイエシュアの弟子たちのことです。今日的な表現を使うなら、メシアニック・ジューです。そして私たち異邦人は、メシアニック・ジューの弟子たちから伝えられたキリストの福音を聞いて、イエシュアを救い主と信じている者です。つまり、ここでの「あなたがた」とは、キリストをかしらとする教会のことです。したがって、携挙されるのは教会(キリストの花嫁)のことで、ここでは旧約時代の聖徒と、携挙の後にくる大患難の聖徒たちは携挙から除外されています。つまり、ここでは**花婿のキリストが花嫁(妻)である教会を迎えに来る**ことを預言しているのです。先ほどの「メ・ゴサレ」という賛美はそのことの喜びを歌ったものです。以下のヨハネの黙示録 19 章 7~8 節のみことばを歌にしたものです。

【新改訳 2017】

7 私たちは喜び楽しみ、神をほめたたえよう。子羊の婚礼の時に来て、花嫁は用意ができたのだから。

8 花嫁は、輝くきよい亜麻布をまとうことが許された。その亜麻布とは、聖徒たちの正しい行いである。

※「**子羊の婚礼**の時に来て」は、改訂第三版では「**小羊の婚姻**の時に来て」と訳されていました。

●小羊の婚礼の時、花嫁である教会は花婿なるキリストが迎えに来るその用意が整ったのです。花嫁が真っ白なドレスを着る準備ができた時、花婿が天から迎えに来るのです。これから天において結婚式がなされるからです。結婚式を終えたなら、花婿と花嫁が共に住むことは当然です。その住まいを整えるために、一度、イエシュアは天に戻って行くのです。そのことがヨハネの福音書 14 章に記されているのです。

●ヨハネの福音書 14 章 1～3 節のみことばと黙示録 19 章 7～8 節のみことばは、私たちが単に天に引き上げられるだけではなく、そこでキリストと教会が結婚するという事実(婚礼)を預言しているのです。ですから主といつまでも共に住むのです。主のおられるところにはいつも共にいるのですから、やがてキリストが地上再臨するときには、共に、地上に来るのは至極当然なことです。空中再臨も地上再臨もまだ実現していませんが、そのことは必ず起こるのです。

3. コリント人への手紙第一 15 章 51～52 節

【新改訳 2017】 I コリント 15 章 51～52 節

51 聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな眠るわけではありませんが、**みな変えられます**。

52 終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちに**変えられます**。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは**変えられる**のです。

●このテキストで重要なことは、主とお会いするときには、すでに主にあって死んだ者も「**朽ちないものによみがえり**」、またそのとき生きている者も、同じく「**朽ちないものに変えられる**」ということです。なぜなら、血肉のからだは神の国を相続できないからです。「**朽ちないものを必ず着なければならぬ**」のです。

●イエシュアが死から復活されたとき、そのからだはどのようなものだったのでしょうか。姿かたちは死ぬ前と同じようであったとしても、少し違っていました。復活されたその夜、イエシュアは弟子たちのいるところに来られましたが、ドアをノックせずに、閉まった戸をすり抜けて入って来られました(ヨハネ 20:19～20)。また、エマオという村に帰る弟子たちと聖書についての話をすることもできました。目に見えない霊ではなかったのです。目に見える新しいよみがえりの身体をもっていました。骨も肉も持ちながら、朽ちることのないからだなのです。不思議がっている弟子たちの前で、イエシュアは「ここに何か食べ物がありますか」と言われました。弟子たちが焼いた魚を一切れ差し上げると、イエシュアは彼らの前でそれを取って召し上がった、と聖書は記しています(ルカ 24:42～43)。**私たちもイエシュアがよみがえられたからだと同様のからだを与え**

られるのですが、それが実現するのは、空中に携挙される直前(あるいは同時)です。

●このことを「**第一の復活**」にあずかると言います。この「**第一の復活**」にあずかれる人は幸いです。イエシユアを信じなかった人はどうなるのでしょうか。当然、携挙されませんからこの復活にあずかることはできませんが、「**第二の復活**」にあずかります。ただしそれは「**第一の復活**」にあずかれなかった者たちで、「**第二の復活**」は最後の審判、最後のさばきのために甦るのです。しかも朽ちないからだを与えられて、永遠のさばきである「**火の池に投げ込まれる**」のです(黙示 20:15)。これを「**第二の死**」と言います。

4. テサロニケの手紙第一 5 章 1~6 節

●使徒パウロは、テサロニケの手紙第一 4 章 13~18 節で主の「**空中再臨**」と「**教会の携挙**」について書いた後で、5 章において「**主の日が夜中の盗人のように来る**」と述べています。ここでの「**主の日**」とは患難の時を意味しています。しかし、「**あなたがたは暗闇の中にはいないのですから、その日(主の日=患難時代)が盗人のようにあなたがたを襲うことはありません**」と記しています。

●5 章 1 節から見てみましょう。

【新改訳 2017】 I テサロニケ 5 章 1~11 節

- 1 兄弟たち。その時と時期については、あなたがたに書き送る必要はありません。
- 2 主の日は、盗人が夜やって来るように来ることを、あなたがた自身よく知っているからです。
- 3 人々が「平和だ、安全だ」と言っているとき、妊婦に産みの苦しみが臨むように、突然の破滅(反キリストによる大患難)が彼らを襲います。それを逃れることは決してできません。
- 4 しかし、兄弟たち。あなたがたは暗闇の中にいないので、その日が盗人のようにあなたがたを襲うことはありません。
- 5 あなたがたはみな、光の子ども、昼の子どもなのです。私たちは夜の者、闇の者ではありません。
- 6 ですから、ほかの者たちのように眠っていないで、**目を覚まし、身を慎んでいましょう。**
- 7 眠る者は夜眠り、酔う者は夜酔うのです。
- 8 しかし、私たちは昼の者なので、信仰と愛の胸当てを着け、救いの望みとかぶとをかぶり、**身を慎んでいましょう。**
- 9 神は、私たちが御怒り(**大患難の出来事**)を受けるようにではなく、主イエス・キリストによる救いを得るように定めてくださったからです。
- 10 主が私たちのために死んでくださったのは、私たちが、目を覚ましていても眠っていても、主とともに生きようになるためです。
- 11 ですからあなたがたは、現に行っているとおりに、互いに励まし合い、互いを高め合いなさい。

●9 節が示しているように、神のご計画のマスタープランでは、教会は反キリストの支配の中で起こるような大患難には会いません。反キリストによる大患難はとても恐ろしい出来事です。しかしそのことを神が許しておられるのは、神が選ばれたイスラエルの民のかたくなな心を打ち砕いて、彼らを民族的に回心させる最後の神のあわれみの時だからです。このことについては、地上再臨の学びのときに改めて学ぶ予定です。

●ダニエルが預言した七十週最後の一週が始まる前に、キリストは突如として空中再臨され、教会は携挙されるのです。ですから、いつそれが起こってもおかしくない時代に私たちは生きているのです。

●ヨハネの福音書 21 章 19 節で、イエシュアがペテロに対して「わたしに従いなさい」と言われたとき、ペテロは「主よ。この人はどうですか。」と言いました。この人とはヨハネのことですが、イエシュアはこう言われました。「わたしの来るまで彼が生きながらえるのをわたしが望むとしても、それがあなたに何のかかわりがありますか。あなたはわたしに従いなさい。」と。この会話で注目したいことは、ヨハネが生きている間に、イエシュアが戻って来られる可能性があったということです。携挙はいつでも起こり得ることを暗に示しています。

●そのときは刻々と迫っているのです。イスラエルが建国し、神の民であるユダヤ人たちがイスラエルに帰還していることも神のタイムテーブルが進んでいることのしるしです。心がかたくななために大患難を通らされるユダヤ人たちから見れば、主にあるクリスチャンたち(メシアニック・ジューの人も含めた教会)は、彼らにとって妬みを引き起こすような存在となるはずでず。確かな希望が与えられている教会は、今というこの時に、一人でも多くの方がキリストの福音を信じて永遠のいのちを持つことができるように、御国の福音を宣べ伝えなければなりません。またすでにイエシュアをメシア(救い主)と信じることによって永遠のいのちを与えられた者は、そのいのちをさらに豊かにしながら、目を覚ましつつ、互いに励まし合いながら、主の再臨(空中再臨)の時を待ち望まなければなりません。

